■このコーナーを担当したのは、
深見　恭子さん（村田）

「この子たちの夏」を語りつづけて10年

戦争の悲惨さや命の尊さを伝えていこうと、毎年、朗読劇「この子たちの夏」を自主上演している「はらんきょうの会」（代表＝加藤由美子さん）。はらんきょうとは、植物の巴欖杏（スモモの一種）のことで、劇に出てくる詩の中の言葉からとったものです。8月5日の公演に向け、明野公民館で行われていた「この子たちの夏」の練習を取材しました。

広島・長崎の記憶を伝えていく

「明治は亡くなるとき、（略）わたしも思わず『お母ちゃんもいっしょに行くからね』と申しましたら、『後からでいいよ』と申しました。『お母ちゃんに会えたからいいよ』とも申しました」。（山下明治の母　萩子　―この子たちの夏より―）

シーンと静まりかえった夜の公民館に、子を思う母の声が響きます。「この子たちの夏」の公演に向けての練習が始まりました。麦わら帽子を背に、台本を手に、一人ずつ台詞を読み上げていきます。BGMに合わせての練習も熱を帯び、お互いに批評しながら一心不乱に練習する姿に、真剣さが伝わってきます。

「この子たちの夏」は、広島、長崎で被爆した母と子の体験手記をもとに構成された朗読劇。市内の主婦を中心とした「はらんきょうの会」が、子どもたちにも参加を呼びかけて自主上演を行い、今年で10年目を迎えます。

今年の公演に参加する子どもたちは4人。去年も参加した大村小の田中美里さん。今年はお友達の藤沢真衣さんを誘っての参加です。「練習は難しいけれど楽しい」「担任の先生も応援してくれている」とはりきっています。姉妹で参加している上野小の坂入幸さんと宰さん。「家では一緒に練習しないよ」と言いながらも、目と目でタイミングを合わせています。取材した日は、全体練習の3回目ということでしたが、息もピッタリでした。

公演当日は広島、長崎を思い出させるようなとても暑いでした。集まった大勢の観客を前に、練習の成果を十分に発揮し、素晴らしい公演になりました。改めて戦争の悲惨さ、命の尊さ、平和の大切さを思い知らされました。

女性差別問題を茨城弁で

この他にも、はらんきょう版「茨城弁で語る女性差別撤廃条約」の出前公演も行っています。条約と聞くとちょっと難しそうと考えてしまいますが、家庭の主婦が井戸端会議をするように日常の出来事に置き換えて語りかけてくれます。それも上手な茨城弁で。タイムリーな話題も織り込むので、公演前は台本の修正、練習とあわただしく忙しい日が続くそうです。そんな努力の成果でしょうか、私の観た公演も、会場全体が一つになって、改めて聞く茨城弁に笑顔でうなずいていました。

公演だけでなく、条約や人権、朗読法などの勉強会も行っているという、はらんきょうの会のみなさん。これからも向上心を持って活動していってほしいと期待しています。

▲8月5日、明野公民館で上演された「この子たちの夏」